

美術の窓(172)

蔦屋重三郎版の狂歌入錦絵

大和文華館館長 浅野秀剛

錦絵とは、多色摺浮世絵版画の完成形をいう。宝暦期(1751～64)に制作刊行された紅摺絵(2～4色の色板を用いた初期の多色摺版画)が、明和2年(1765)に鈴木春信らの工夫により、錦のような色合いの多色摺版画が完成し、錦絵と命名された。それ以降、江戸時代は専ら錦絵と呼ばれたので、本稿でもその語を用いることにしたい。「版画」は明治後期に作られた言葉である。

今年の大河ドラマは、江戸の版元、蔦屋重三郎(以降「蔦重」と略す)を主人公にした「べらぼう」である。私は浮世絵が専門で、歌麿や写楽の論文や著書があるので、そのドラマの「浮世絵考証」を引き受けている。4月から東京国立博物館で始まる特別展「蔦屋重三郎」にも関わっているので、その図録にも小論を寄稿した。ここでは、それには書かなかった、蔦重版の狂歌入錦絵について述べてみたい。

江戸時代に天明狂歌と呼ばれる狂歌ブームの草分けになったのが、天明3年(1783)刊「万載狂歌集」(須原屋伊八版)である。蔦重も直ちに反応し、多くの狂歌本を出し、まもなく狂歌関係の出版をほぼ独占することになる。蔦重が力を入れたのは、絵入の狂歌本であり、浮世絵師の北尾重政、北尾政演、北尾政美、喜多川歌麿を起用した。喜多川歌麿だけでも十指に余る絵入狂歌本を刊行し、『画本虫撰』(天明8年刊)に代表される彩色摺狂歌本のすばらしさは世界的に評価されている。同時に蔦重は、狂歌入の錦絵も刊行した。

蔦重版狂歌入錦絵が制作され始めるのは天明(1781～89)後期からである。画中に「極」印のない作品、つまり、「極」印が出現する寛政3年(1791)より前、寛政2年以前の状況を把握するために、狂歌入錦絵のうち、「極」印のないものを抽出すると、

次のようなものが認められる。

北尾政演…「狂歌師細判似顔絵」天明6～7頃、蔦屋重三郎版、8図(図1)…ティモシー・クラーク「北尾政演画の狂歌師細判似顔絵」(『江戸文学』19、1998年)による喜多川歌麿…「狂歌入中判風俗画」天明7～9頃、蔦屋重三郎版、6図
同…「狂歌入間判風俗画」天明8～寛政2頃、蔦屋重三郎版、8図(図2)
同…「狂歌入中判風俗画(短冊枠、色紙枠のあるもの)」寛政1～2頃、蔦屋重三郎版、3図
同…大判2～3枚続で狂歌入の風俗画、天明7～寛政2頃、蔦屋重三郎版、5組
同…間判2枚続で狂歌額を描かれているもの、天明8～寛政2頃、蔦屋重三郎版、1組
勝川春潮…「狂歌入中判風俗画(短冊枠、色紙枠のあるもの)」寛政1～2頃、蔦屋重三郎版、3図
北尾政美…中判「百富士」(全図に大田南畝の狂詩と狂歌賛が入る)天明8～寛



図1



図2

政2頃、蔦屋重三郎版、10図
同…中判「柳下の茶見世」天明8～寛政2頃、蔦屋重三郎版、東京国立博物館蔵
勝川春朗(北斎)…中判「茶の湯」天明8～寛政2頃、蔦屋重三郎版、日本浮世絵博物館蔵
同…小判「壬生狂言」寛政1～2頃、蔦屋重三郎版、13図
鳥文斎栄之…「狂歌入中判風俗画」天明7～9頃、蔦屋重三郎版、4図…染谷美穂「鳥文斎栄之目録」(千葉市美術館、2023年)による
窪俊満…大奉書全紙判「狂歌師見立六歌仙」、蔦屋重三郎版、天明8～寛政2頃
同…大判3枚続「曲水の宴」、版元印なし。右図に「路考(四代目瀬川菊之丞)」の「雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢敘幽情」(蘭亭序の一部)、中図に「花道つらね(五代目市川團十郎)」の狂歌、左図に「訥子(三代目沢村宗十郎)」の発句あり。

以上を通覧すると、俊満「曲水の宴」(狂歌は一首しかない)、例外的なものとして考察から省く)以外はすべて蔦屋重三郎版と判明する。歌麿画「狂歌入中判風俗画」6図と、政美「柳下の茶見世」、春朗「茶の湯」、栄之画「狂歌入中判風俗画」4図は、すべて狂歌入中判風俗画であり、刊行期も同じ頃と思われるので、蔦重として

は同一シリーズという認識であったのかもしれない。同様に、歌麿画「狂歌入中判風俗画(短冊枠、色紙枠のあるもの)」3図と春潮画「狂歌入中判風俗画(短冊枠、色紙枠のあるもの)」3図も同一シリーズであった可能性がある。したがって蔦重は、天明6年から寛政2年の5年間に、細判、中判、間判、大判、小判から大奉書全紙判まで、多くの浮世絵師に作画を依頼し、意識的に狂歌入錦絵を刊行し続け、その版権を維持したと考えられる。

蔦重版狂歌入錦絵に入れられている狂歌は、南畝に代表される著名な狂歌師と、富裕な狂歌師のものと推定され、富裕な狂歌師のものは入銀物(スベンサー付き出版)と考えられる。蔦重は、入銀で基本的な制作料を確保し、一般売りで利益を得るといって戦略だったのであろう。その構造は遊女絵や俄など吉原関係の錦絵と同一であった。5年間に多様な狂歌入錦絵を刊行した蔦重は、全体として利益が残ればいいと考え、個々の作品の売れ行きにはこだわらなかった可能性もある。

ところが、寛政3年以降、狂歌入錦絵の蔦重独占体制は崩れる。他版元による狂歌入錦絵の早いものには、若狭屋与市版、中判「狂歌入り風俗十二月」12枚揃(寛政4～5年頃)、丸屋文右衛門版、大判2枚組「店頭難波屋おきた」1「店頭の高島おひさ」(寛政5年頃)、同、横大判「囲碁を囲む五美人」(寛政5年頃)があり、その後も断続的に他版元から狂歌入錦絵が刊行されている。蔦重が狂歌入錦絵の版権を死守しなかった(死守できなかった)理由として、寛政3年の身上半減の刑の痛手が大きく、版権を譲渡して利益を確保せざるを得ない事情があったと推察される(蔦重は、寛政3年以降も狂歌入錦絵を刊行している、その版権を全部手放したわけではない)。蔦重の胸中は果たして。

図1 「題鹿都部真顔似顔 花道つらね」大英博物館蔵、『江戸文学』19、より複写
図2 「狂歌入間判風俗画 憩う農婦」個人蔵、『喜多川歌麿』展図録(大英博物館・千葉市美術館、1995年)より複写

季刊 美のたより No.230

令和7年 4月 4日

発行 大和文華館